Unified Managerのホスト名の変更

Active IQ Unified Manager

NetApp
November 13, 2026

This PDF was generated from https://docs.netapp.com/ja-jp/active-iq-unified-manager-918/config/task_change_unified_manager_host_name_on_vmware.html on November 13, 2026. Always check docs.netapp.com for the latest.

目次

Unified Managerのホスト名の変更 1
Active IQ Unified Manager 仮想アプライアンスのホスト名を変更する 1
Active IQ Unified Manager でHTTPSセキュリティ証明書を生成する 1
Active IQ Unified Manager 仮想マシンを再起動する 3
Linux システム上の Active IQ Unified Manager ホスト名の変更 4

Unified Managerのホスト名の変更

Active IQ Unified Manager 仮想アプライアンスのホスト名を変更する

ネットワーク ホストの名前は、Unified Manager仮想アプライアンスの導入時に割り当てられます。このホスト名は導入後に変更することができます。ホスト名を変更する場合は、HTTPS証明書も再生成する必要があります。

開始する前に

このタスクを実行するには、Unified Managerにメンテナンス ユーザとしてログインするか、アプリケーション管理者ロールが割り当てられている必要があります。

Unified Manager Web UIには、ホスト名（またはホストのIPアドレス）を使用してアクセスできます。導入時に静的IPアドレスを使用してネットワークを設定した場合は、指定したネットワーク ホストの名前を使用します。DHCPを使用してネットワークを設定した場合は、DNSからホスト名を取得します。DHCP または DNS が正しく設定されていない場合、ホスト名「`Unified Manager`」が自動的に割り当てられ、セキュリティ証明書に関連付けられます。

ホスト名を変更した場合、Unified Manager Web UIへのアクセスに新しいホスト名を使用するには、ホスト名の元の割り当て方法に関係なく、必ず新しいセキュリティ証明書を生成する必要があります。

ホスト名ではなくサーバのIPアドレスを使用してWeb UIにアクセスする場合は、ホスト名の変更時に新しい証明書を生成する必要はありません。ただし、証明書のホスト名が実際のホスト名と同じになるように証明書を更新することを推奨します。

Unified Managerでホスト名を変更したら、OnCommand Workflow Automation（WFA）で手動でホスト名を更新する必要があります。ホスト名はWFAでは自動的に更新されません。

新しい証明書は、Unified Manager仮想マシンを再起動するまで有効になりません。

手順

1. HTTPSセキュリティ証明書を生成する

   新しいホスト名を使用してUnified Manager Web UIにアクセスする場合は、HTTPS証明書を再生成して新しいホスト名に関連付ける必要があります。

2. Unified Manager仮想マシンを再起動する

   HTTPS証明書を再生成したら、Unified Manager仮想マシンを再起動する必要があります。

Active IQ Unified Manager でHTTPSセキュリティ証明書を生成する

Active IQ Unified Managerを初めてインストールすると、デフォルトのHTTPS証明書がインストールされます。新しいHTTPSセキュリティ証明書を生成して、既存の証明書を置き換えることができます。

開始する前に

アプリケーション管理者のロールが必要です。

証明書を再生成する理由はいくつもあります。たとえば、識別名（DN）をより適切な値に変更する場合、キーのサイズを大きくする場合、有効期限を延長する場合、現在の証明書の有効期限が切れた場合などです。

Unified Manager Web UI にアクセスできない場合は、メンテナンス コンソールを使用して同じ値で HTTPS 証明書を再生成できます。証明書を再生成する際に、鍵のサイズと鍵の有効期間を指定できます。メンテナンス コンソールの `Reset Server Certificate`オプションを使用すると、397日間有効な新しいHTTPS証明書が作成されます。この証明書には、2048ビットのRSA鍵が含まれます。

手順

1. 左側のナビゲーションペインで、**General** > **HTTPS Certificate** をクリックします。
2. *HTTPS証明書を再生成*をクリックします。

   [HTTPS証明書の再生成]ダイアログ ボックスが表示されます。

3. 証明書を生成する方法に応じて、次のいずれかを実行します。

状況	操作
現在の値で証明書を再生成する	「現在の証明書属性を使用して再生成」オプションをクリックします。

状況	操作
別の値で証明書を生成する	*現在の証明書の属性を更新する*オプションをクリックします。 「共通名」と「代替名」のフィールドに新しい値を入力しない場合、既存の証明書の値が使用されます。「Common Name」には、ホストのFQDNを設定する必要があります。その他のフィールドには値を入力する必要はありませんが、証明書に値を反映させたい場合は、たとえばEMAIL、COMPANY、DEPARTMENT、City、State、Countryなどのフィールドに値を入力できます。利用可能な鍵サイズ（鍵アルゴリズムは「RSA」です）と有効期間を選択することもできます。 • キーサイズの許容値は 2048、3072、および `4096`です。 • 有効期間は1日～36500日です。 ただし、推奨される有効期間は397日（13カ月）以内です。397日を超える有効期間を選択しても、CSRをエクスポートして既知のCAから署名を受ける場合にCAからは有効期間が397日に削減され署名済み証明書が返されます。 • 証明書の[別名]フィールドにローカルの識別情報を含めない場合は、[ローカルの識別情報を除外する（ローカルホストなど）]チェックボックスを選択します。このチェックボックスを選択すると、このフィールドで入力した情報だけが[別名]フィールドで使用されます。このフィールドを空白にした場合は、[別名]フィールドのない証明書が生成されます。

4. 証明書を再生成するには、「はい」をクリックします。
5. 新しい証明書を有効にするためにUnified Managerサーバを再起動します。
6. HTTPS証明書を表示して新しい証明書の情報を確認します。

Active IQ Unified Manager 仮想マシンを再起動する

仮想マシンは、Unified Managerのメンテナンス コンソールから再起動できます。新しいセキュリティ証明書を生成した場合や仮想マシンで問題が発生した場合、仮想マシンの

再起動が必要になります。

開始する前に

仮想アプライアンスの電源をオンにします。

メンテナンス コンソールにメンテナンス ユーザとしてログインします。

*Restart Guest*オプションを使用して、vSphereから仮想マシンを再起動することもできます。詳細については、VMwareのドキュメントを参照してください。

手順

1. メンテナンス コンソールにアクセスします。
2. **System Configuration** > **Reboot Virtual Machine** を選択します。

Linux システム上の Active IQ Unified Manager ホスト名の変更

必要に応じて、Unified ManagerをインストールしたRed Hat Enterprise Linuxマシンのホスト名をあとから変更することができます。たとえば、タイプ、ワークグループ、監視対象のクラスタ グループなどがわかるような名前に変更すると、Linuxマシンのリストでの Unified Managerサーバを識別しやすくなります。

開始する前に

Unified ManagerがインストールされているLinuxシステムへのrootユーザ アクセスが必要です。

Unified Manager Web UIには、ホスト名（またはホストのIPアドレス）を使用してアクセスできます。導入時に静的IPアドレスを使用してネットワークを設定した場合は、指定したネットワーク ホストの名前を使用します。DHCPを使用してネットワークを設定した場合は、DNSサーバからホスト名を取得します。

ホスト名を変更した場合、Unified Manager Web UIへのアクセスに新しいホスト名を使用するには、ホスト名の元の割り当て方法に関係なく、必ず新しいセキュリティ証明書を生成する必要があります。

ホスト名ではなくサーバのIPアドレスを使用してWeb UIにアクセスする場合は、ホスト名の変更時に新しい証明書を生成する必要はありません。ただし、証明書のホスト名が実際のホスト名と同じになるように証明書を更新することを推奨します。新しい証明書は、Linuxマシンを再起動するまで有効になりません。

Unified Managerでホスト名を変更したら、OnCommand Workflow Automation（WFA）で手動でホスト名を更新する必要があります。ホスト名はWFAでは自動的に更新されません。

手順

1. 変更するUnified ManagerシステムにrootユーザとしてログインしMySQLソフトウェアを停止します。
2. 次のコマンドを入力して、Unified Managerソフトウェアと関連するMySQLソフトウェアを停止します。

   ```
   systemctl stop ocieau ocie mysqld
   ```

3. Linux `hostnamectl`コマンドを使用してホスト名を変更します：

   ```
   hostnamectl set-hostname new_FQDN
   ```

```
hostnamectl set-hostname nuhost.corp.widget.com
```

4. サーバのHTTPS証明書を再生成します。

   ```
   /opt/netapp/essentials/bin/cert.sh create
   ```

5. ネットワーク サービスを再起動します。

   ```
   systemctl restart NetworkManager.service
   ```

6. サービスが再起動されたら、新しいホスト名でpingを実行できるかどうかを確認します。

   ```
   ping new_hostname
   ```

   ```
   ping nuhost
   ```

   元のホスト名に対して設定していた同じIPアドレスが返されることを確認します。

7. ホスト名を変更して確認したら、次のコマンドを入力してUnified Managerを再起動します。

   ```
   systemctl start mysqld ocie ocieau
   ```

著作権に関する情報

Copyright © 2026 NetApp, Inc. All Rights Reserved. Printed in the U.S.このドキュメントは著作権によって保護されています。著作権所有者の書面による事前承諾がある場合を除き、画像媒体、電子媒体、および写真複写、記録媒体、テープ媒体、電子検索システムへの組み込みを含む機械媒体など、いかなる形式および方法による複製も禁止します。

ネットアップの著作物から派生したソフトウェアは、次に示す使用許諾条項および免責条項の対象となります。

このソフトウェアは、ネットアップによって「現状のまま」提供されています。ネットアップは明示的な保証、または商品性および特定目的に対する適合性の暗示的保証を含み、かつこれに限定されないいかなる暗示的な保証も行いません。ネットアップは、代替品または代替サービスの調達、使用不能、データ損失、利益損失、業務中断を含み、かつこれに限定されない、このソフトウェアの使用により生じたすべての直接的損害、間接的損害、偶発的損害、特別損害、懲罰的損害、必然的損害の発生に対して、損失の発生の可能性が通知されていたとしても、その発生理由、根拠とする責任論、契約の有無、厳格責任、不法行為（過失またはそうでない場合を含む）にかかわらず、一切の責任を負いません。

ネットアップは、ここに記載されているすべての製品に対する変更を随時、予告なく行う権利を保有します。ネットアップによる明示的な書面による合意がある場合を除き、ここに記載されている製品の使用により生じる責任および義務に対して、ネットアップは責任を負いません。この製品の使用または購入は、ネットアップの特許権、商標権、または他の知的所有権に基づくライセンスの供与とはみなされません。

このマニュアルに記載されている製品は、1つ以上の米国特許、その他の国の特許、および出願中の特許によって保護されている場合があります。

権利の制限について：政府による使用、複製、開示は、DFARS 252.227-7013（2014年2月）およびFAR 5252.227-19（2007年12月）のRights in Technical Data -Noncommercial Items（技術データ - 非商用品目に関する諸権利）条項の(b)(3)項、に規定された制限が適用されます。

本書に含まれるデータは商用製品および / または商用サービス（FAR 2.101の定義に基づく）に関係し、データの所有権はNetApp, Inc.にあります。本契約に基づき提供されるすべてのネットアップの技術データおよびコンピュータ ソフトウェアは、商用目的であり、私費のみで開発されたものです。米国政府は本データに対し、非独占的かつ移転およびサブライセンス不可で、全世界を対象とする取り消し不能の制限付き使用権を有し、本データの提供の根拠となった米国政府契約に関連し、当該契約の裏付けとする場合にのみ本データを使用できます。前述の場合を除き、NetApp, Inc.の書面による許可を事前に得ることなく、本データを使用、開示、転載、改変するほか、上演または展示することはできません。国防総省にかかる米国政府のデータ使用権については、DFARS 252.227-7015(b)項（2014年2月）で定められた権利のみが認められます。

商標に関する情報

NetApp、NetAppのロゴ、http://www.netapp.com/TMに記載されているマークは、NetApp, Inc.の商標です。その他の会社名と製品名は、それを所有する各社の商標である場合があります。